

平成15(2003)年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

鳥取城関連遺跡
秋里遺跡
桂見古墳群

平成十五(2003)年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

一〇〇四

2004

鳥取市教育委員会

鳥取市教育委員会

序 文

鳥取市は、海・山・大砂丘など豊かな自然環境に恵まれた山陰東部の中核都市として発展してまいりました。

鳥取市内には、現在約2,300あまりを数える多くの原始・古代遺跡が知られていますが、近年の各種開発事業の増加とともにその取り扱いが重要課題となっています。埋蔵文化財は地域の先人の生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき貴重な市民の財産です。このような認識のもと、鳥取市教育委員会では開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関との協議を重ね、また地元の皆様の深い御理解をいただきながら文化財保護行政を進めているところです。

さて、ここに報告します鳥取城関連遺跡、桂見古墳群、秋里遺跡の発掘調査事業も地権者の方々をはじめとする関係各位のご協力によって、無事所期の目的をはたし、ここに報告書刊行のはこびとなりました。ささやかな冊子ではあります
が、市民の皆様ならびに関係各位のご利用に供していただければ幸いです。

平成16年3月

鳥取市教育委員会

教育長 中川俊隆

例　　言

1. 本書は、平成15年度に国、県の補助金を得て鳥取市教育委員会が実施した埋蔵文化財調査の記録である。
2. 調査を実施した遺跡は鳥取城関連遺跡、杜見所在遺跡、秋里遺跡である。なお、杜見所在遺跡は試掘調査によって古墳群と判明したため、本報告では杜見古墳群とした。
3. 本書に用いた方位は磁北を示し、レベルは海拔標高である。
4. 発掘調査によって作成した記録類及び出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管している。
5. 発掘調査の実施にあたっては、多くの方々から指導・助言ならびにご協力をいただいた。厚く感謝いたします。
6. 本報告書の編集は、前田均、平川誠が担当した。
7. 発掘調査の体制は以下のとおりである。

発掘調査主体　　鳥取市教育委員会
事務局　　鳥取市教育委員会庶務課文化財室
調査担当　　前田　均、平川　誠

本文目次

序 文
例 言
目 次

Iはじめに	
1 発掘調査の契機と目的	1
2 発掘調査の経過	1
II鳥取城関連遺跡	
1 鳥取城の位置と環境	1
2 調査の概要	3
III桂見古墳群	
1 遺跡の位置と環境	8
2 調査の概要	9
IV秋里遺跡	
1 遺跡の位置と環境	13
2 調査の概要	13
Vおわりに	14

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第1図	調査地周辺遺跡分布図	2
第2図	鳥取城修復輪絵図(万延元年)『鳥取県立博物館所蔵』	3
第3図	鳥取城閑連遺跡調査位置図	4
第4図	鳥取城閑連遺跡第1トレンチ実測図	5
第5図	鳥取城閑連遺跡第2トレンチ実測図	5
第6図	鳥取城閑連遺跡第3トレンチ実測図	6
第7図	鳥取城閑連遺跡第4トレンチ実測図	7
第8図	鳥取城閑連遺跡第4トレンチ出土遺物実測図	7
第9図	鳥取城閑連遺跡第5トレンチ実測図	8
第10図	鳥取城閑連遺跡第5トレンチ出土遺物実測図	8
第11図	桂見古墳群調査位置図	9
第12図	桂見古墳群第1トレンチ実測図	10
第13図	桂見古墳群第2トレンチ実測図	11
第14図	桂見古墳群第3トレンチ実測図	11
第15図	桂見古墳群第4トレンチ実測図	11
第16図	桂見古墳群第5トレンチ実測図	12
第17図	桂見古墳群第7トレンチ実測図	12
第18図	桂見古墳群第8トレンチ実測図	12
第19図	秋里遺跡調査位置図	13
第20図	秋里遺跡第1トレンチ実測図	13

図版目次

図版1	鳥取城閑連遺跡調査地遠景(天球丸から)	1
	鳥取城閑連遺跡第1トレンチ調査地(南西から)	
	鳥取城閑連遺跡第1トレンチ(北西から)	
図版2	鳥取城閑連遺跡第1トレンチ水路検出状況(北東から)	1
	鳥取城閑連遺跡第1トレンチ北東壁断面(南西から)	
	鳥取城閑連遺跡第2トレンチ(南東から)	
図版3	鳥取城閑連遺跡第2トレンチ溝検出状況(北西から)	1
	鳥取城閑連遺跡第3トレンチ(北西から)	
	鳥取城閑連遺跡第3トレンチ南東壁断面(北西から)	
図版4	鳥取城閑連遺跡第3トレンチ出土遺物	1
	鳥取城閑連遺跡第4トレンチ調査地(南東から)	
	鳥取城閑連遺跡第4トレンチ(南西から)	
図版5	鳥取城閑連遺跡第4トレンチ北西壁断面(東から)	1
	鳥取城閑連遺跡第4トレンチ石垣残存状況(南東から)	
	鳥取城閑連遺跡第4トレンチ溝検出状況(南東から)	
図版6	鳥取城閑連遺跡第5トレンチ調査地(南西から)	1
	鳥取城閑連遺跡第5トレンチ礎石検出状況(南東から)	
図版7	鳥取城閑連遺跡第5トレンチ南西壁断面(北から)	1
	鳥取城閑連遺跡第5トレンチ礎石柱痕跡	
	鳥取城閑連遺跡第5トレンチ杭列検出状況(北東から)	
図版8	鳥取城閑連遺跡第5トレンチ出土遺物	1
	鳥取城閑連遺跡第5トレンチ出土遺物	
	鳥取城閑連遺跡第5トレンチ出土遺物	
図版9	桂見古墳群調査地遠景(南から)	1
	桂見古墳群調査地遠景(北西から)	
	桂見古墳群第1トレンチ(北から)	
図版10	桂見古墳群第1トレンチ(南から)	1
	桂見古墳群第2トレンチ(北から)	
	桂見古墳群第3トレンチ(北から)	
	桂見古墳群第4トレンチ(南から)	
図版11	桂見古墳群第5トレンチ(南東から)	1
	桂見古墳群第6トレンチ(北西から)	
	桂見古墳群第7トレンチ(南西から)	
	桂見古墳群第7トレンチ(北東から)	
図版12	桂見古墳群第8トレンチ(北東から)	1
	桂見古墳群第8トレンチ東壁断面(西から)	
	秋里遺跡第1トレンチ(南西から)	

I はじめに

鳥取市は、鳥取県の東部に所在する面積約237万m²、人口15万人余を擁する県庁所在地である。市域の三方は中国山地から続く山地によって囲まれ、北には日本海を臨む鳥取砂丘が広がる。市の中央には中国山地を源とする千代川が流れ、下流域には冲積作用によって形成された鳥取平野が展開している。この平野部は近年まで主に水田として利用され、縁辺の丘陵部では二十世紀梨を中心とした果樹栽培が行われてきた。しかし、宅地造成、道路建設などの各種開発によって平野部をはじめ、その縁辺の景観が近年変わりつつある。

1 発掘調査の契機と目的

鳥取平野は、原始・古代から人々の生活を支え、政治・経済・文化・交通の要地として重要な地位を占めてきた。これらを背景として、市域には現在約2,300ヶ所あまりの埋蔵文化財包蔵地が確認されており、各種開発事業計画との調整を必要とする遺跡もその数を増してきている。

今回報告する鳥取城関連遺跡、桂見古墳群、秋里遺跡の調査は、公共施設整備および民間の住宅建設計画に伴い実施したものである。事業計画と事業地内における埋蔵文化財の所在確認依頼を受けた鳥取市教育委員会では、当該地の事前確認調査を実施したが、現況から遺跡の所在や具体的な性格を把握することは困難であることから、遺跡の範囲、造構・遺物の有無など具体的な資料を得るために試掘調査を行うこととなった。

2 発掘調査の経過

発掘調査は、トレント掘りによる造構・遺物の所在確認に主眼を置いて行った。現地調査は、鳥取城関連遺跡(第1～第5トレント)から着手し、桂見古墳群(第1～第8トレント)、秋里遺跡(第1トレント)について順次実施した。

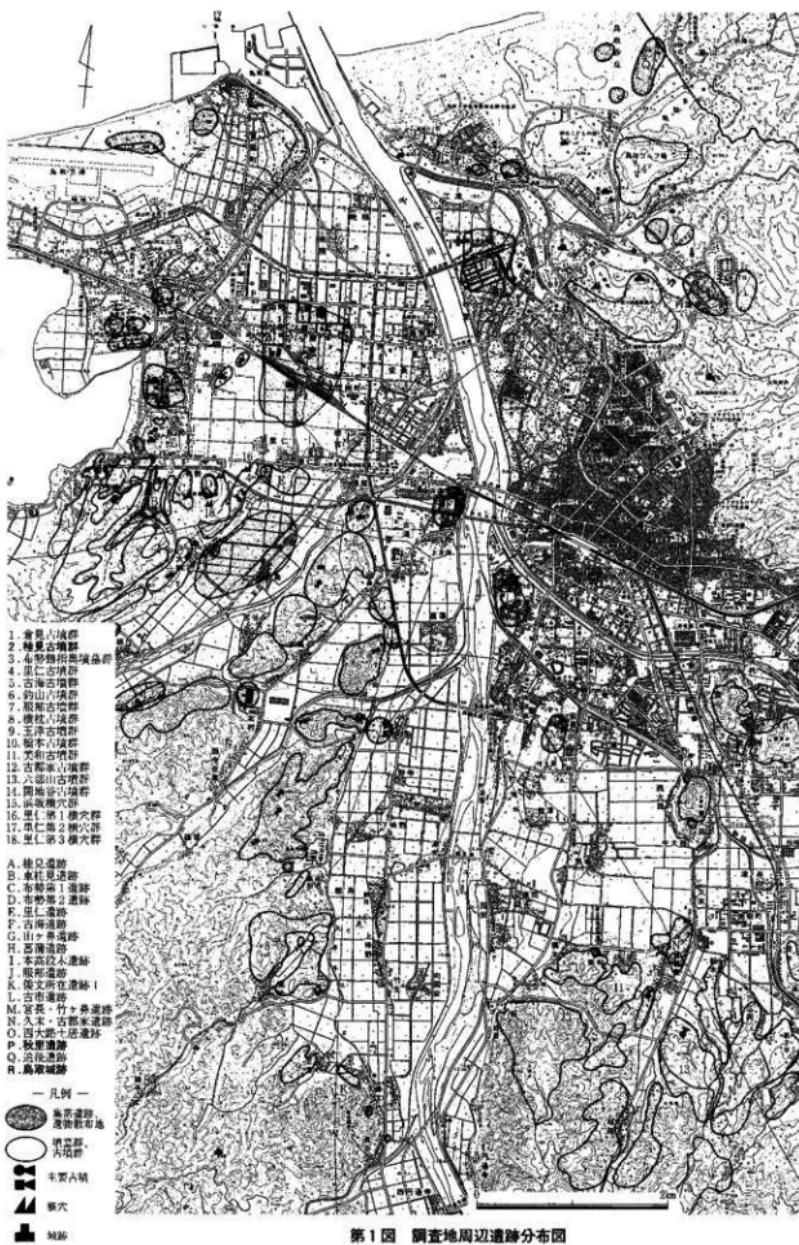
鳥取城関連遺跡の現地調査は、調査位置を設定した後に、防御フェンス設置や重機による客土の除去などの作業が完了した平成15年7月22日から開始した。調査は9月12日まで行い、礎石、石垣、溝状造構、杭列などの遺構を検出することができた。各トレントの記録を行った後、調査地の復元作業を重機を用いて行い、9月30日にすべての現地調査を終了した。桂見古墳群の調査は平成15年9月29から開始し、事業計画地内に4基の古墳が所在していることを確認して10月10日に終了した。秋里遺跡は平成15年10月23日～10月24日に調査を実施した。整理作業、報告書作成は平成15年12月～平成16年1月に行つた。各遺跡の調査面積は、鳥取城関連遺跡80m²、桂見古墳群85.2m²、秋里遺跡5.2m²である。

II 鳥取城関連遺跡

1 鳥取城の位置と環境

鳥取城は、鳥取平野の東側に位置する久松山の山頂(標高263m)に天守閣を構える中世山城の様相を呈する城である。久松山の東側は秀吉の鳥取城攻めの際に本陣が置かれた本陣山に続くが、他の三方は山頂から急斜面で下る急峻な地形をもち、防衛に適した立地条件を備えている。周辺には城や砦が築かれおり、丸山、雁金山の砦や、秀吉の鳥取城攻めの拠点として陣を構えた太閤ヶ平、昼食山砦が知られている。

久松山に城が築かれたのは16世紀中頃(天文年間)である。その後、天正4年(1576年)織田信長と毛利氏との対立から洞院秀吉による中国攻略が始まり、鳥取城もその渦中におかれれる。慶長5年(1600年)の關ヶ原の戦いで西軍に与した鳥取城主の宮部氏は滅ぼし、宮部氏に代わって池田長吉が鳥取城に入った。長吉は城内、城下の大改修を行い、山上の丸の改築や山下の丸の二の丸、天球丸の構築、更には三の丸や堀の拡張整備などを行っている。ここに近世鳥取城のおおよその姿を作り上げた。



第1図 調査地周辺遺跡分布図

豈臣氏が大阪城で滅亡した後の元和3年（1617年）には、姫路城主池田光政が因幡・伯耆両国32万石の鳥取城主として転封されてきた。同時に、鳥取城主であった池田長吉の子長幸は備中松山に転封されている。光政の入国によって、これまで小大名によって分割統治されていた因伯両国は一つに統治され、幕藩体制による鳥取藩が誕生した。寛永9年（1632年）岡山藩主池田光仲は当時幼少であったが、鳥取藩との交替転封の命を受けて光政と入れ替り、以後光仲の子孫が明治維新まで鳥取藩主としてその地位に付くこととなる。

明治維新によって廃藩置県が実施されると、鳥取城は池田家から陸軍省の所管となり、明治12年には鳥取城に残るすべての建物は解体撤去された。その結果、鳥取城には石垣、堀等の遺構のみが残ることとなった。

2 調査の概要

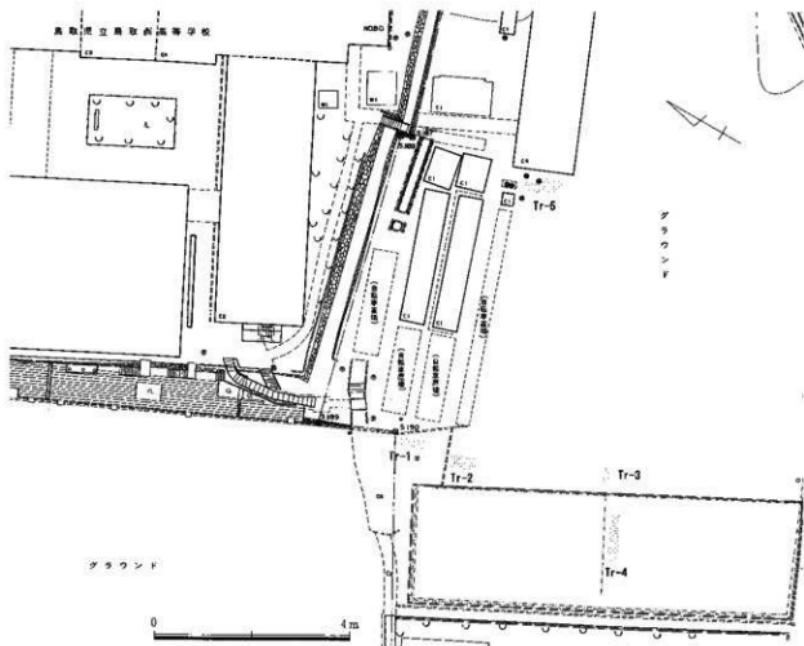
今回の試掘調査は、県立鳥取西高等学校の整備移転計画に伴いその候補地を対象として行ったものである。調査対象地は三の丸の南側にあたり、現在はグラウンドやテニスコート、自転車置き場などの施設として利用されているが、万延元年（1860年）の『鳥取城修覆願絵図』には、「鳥取堀」の記述や、6棟の建物、石垣、堀などが描かれており、当地が鳥取城の一画を占めていたことがわかる。

調査は、絵図をもとに「鳥取堀」の想定地に第1、2トレチ、建物や石垣の所在確認のために第3、4、5トレチを設定し行った。

調査の結果、石垣、礎石、溝状遺構、杭列などが検出され、後世の改変を受けながらも江戸期の遺構が比較的良好に残存していることが明らかになった。



第2図 鳥取城修復願絵図（万延元年）【鳥取県立博物館所蔵】



第3図 鳥取城関連遺跡調査位置図

第三回 第二章 (第4回 図版1・2)

三の丸の南壁石垣から22mあまり南側に設定した $2 \times 6\text{ m}$ のトレンチである。鳥取城市門跡から東に約20m付近にあたり、現在は舗装された通学道に改変されている。

上層は道路整備時の客土や配水管埋設などによる搅乱をかなり受けているが、下層は比較的安定した層序が見られ旧来の状態を保っているものと思われる。下層の埋土状況を見ると、トレンチ北西側で粘土質の第16、17層が堆積しているが、同質の土は南東側では検出されなかった。第17層の暗灰色粘土質が土質や検出位置から推定して「鳥取堀」内の埋土の可能性が考えられる。

遺構は、石材を積上げて築いた溝が検出された。溝上部は配水管埋設に伴い失われているが、残存部で、幅0.9m(内法)、深さ1.4mを測る。水路として築かれたものと思われる。時期は特定できないが、溝の上端部が現地表下25cmで検出されていることや、客土を掘削して築いていることから江戸期まで遡ることはないものと思われる。

遺物は、埋土上層から陶磁器、土師器、下層から陶磁器、溝埋土から陶磁器、須恵器、土師皿が出土した。残存状況は悪くいずれも小片である。

第三回 第三章 (第5回 図版2・3)

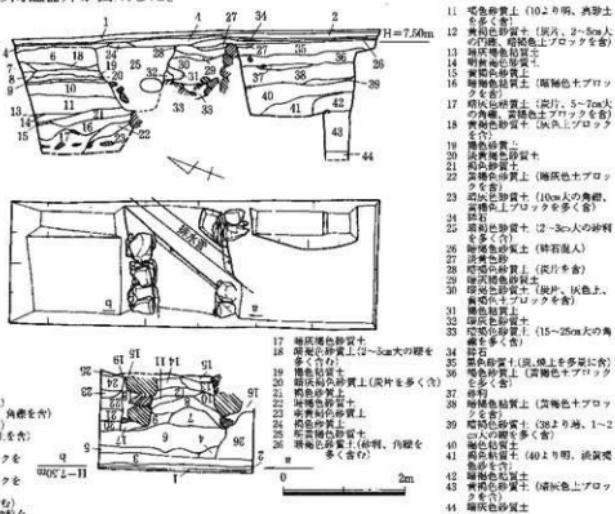
第1トレンチの南6mに設定した $3 \times 6\text{ m}$ のトレンチである。上層は配水管及び水道管の埋設溝によって大きく搅乱を受け、第20、24層にはコンクリート片が混入していることから現地表下90cm前後までは現代の客土とみられる。下層の第10、23層以下はおむね旧来の状態を保っているものと思われ、この下層の第14、15層および第27層の上面から厚さ2~3cmにわたって赤褐色の焼土層が検出された。い

すれにも面的に広がる状況が見られ、焼けしまっている様子から火を強く受けている様子がうかがわれる。

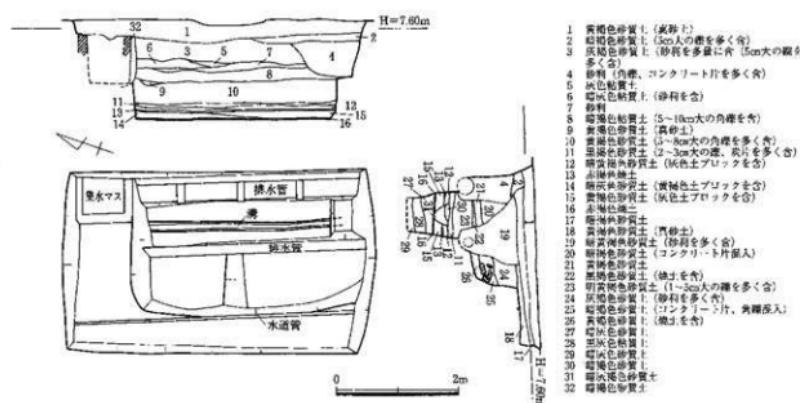
遺構は溝1条が検出された。溝は幅38cm、深さ27cm前後を測り、北西から南東にはば直線的に延びている。遺物は客土から陶器片が出土した。

- 1 アスファルト
- 2 砂石
- 3 塗ぬ砂質土
- 4 黄褐色砂質土(灰砂土?)
- 5 深灰色砂質土(2~5cmの大粒を含む)
- 6 黄褐色砂質土(2~5cmの大粒を含む)
- 7 茶灰褐色砂質土(灰砂土、2~5cmの大粒を含む)
- 8 黄褐色砂質土(灰砂土を含む)
- 9 黄褐色砂質土(灰砂土を含む)
- 10 塗ぬ砂質土。

- 11 H=7.50m
- 12 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 13 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 14 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 15 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 16 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 17 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 18 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 19 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 20 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 21 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 22 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 23 黄褐色砂質土(10cmの角砾、砂利を含むブロックを含む)
- 24 砂利
- 25 陶器片
- 26 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 27 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 28 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 29 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 30 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 31 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 32 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 33 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 34 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 35 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 36 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 37 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 38 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 39 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 40 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 41 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 42 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 43 黄褐色砂質土(灰砂土)
- 44 黄褐色砂質土(灰砂土)



第4図 鳥取城間連遺跡第1トレーンチ実測図

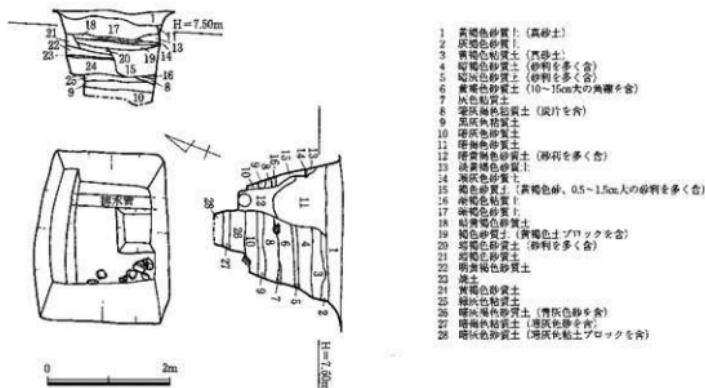


第5図 鳥取城間連遺跡第2トレーンチ実測図

【第3トレンチ実測図】 [第6図 図版3・4]

第2トレンチの南東25mのグランド内に設定したトレンチである。トレンチの東側は配水管の埋設溝によって搅乱を受けている。第5層から上層はグランド整備時の客土と見られるが、客土以下の層序には搅乱された様子は見られず旧来の状態を保っているものと思われる。

明確な遺構は検出されなかったが、第26層の上面から10~20cm大の角礫6点と川原石2点がまとまって検出された。遺物は、客土中から陶器片、第9、10層および26層から陶器片、土師器片が出土した。また、出土層が特定できないが「大」の字が刻印された平瓦片（図版4）が出土している。



第6図 鳥取城関連遺跡第3トレンチ実測図

【第7・8図 図版4・5】 [第7・8図 図版4・5]

第3トレンチ南西7mのテニスコート内に設定した2×10mのトレンチである。表土下30cmはテニス場整備時の整地層とみられ、トレンチ北西側には配水管を埋設した溝が掘り込まれている。また、第14層にはコンクリート片やビニール片などが混入しており、第13層より上層が新しい客土とみられる。第13層以下の堆積層についてみると、層序が細かく分かれると層序が搅乱もなくおおむね旧来の状態を保っているものと考えられる。

遺構は、トレンチの北東側で溝と土坑状遺構、西側で石垣が検出された。溝は第24層の上面から掘り込まれており幅80cm、深さ30cm前後を測る。土坑状遺構は断面観察で確認した。溝の西側に位置し、幅78cm、深さ50cmを測る。埋土は第27、28層である。

石垣はトレンチの西側で検出した。40~60cm大の石を積み、背面に15~30cm大の角礫を栗石として置いている。断面観察から第33、37層を掘削して石垣を築いていることがわかる。この石垣については、検出位置などから万延元年（1860年）「鳥取城修復願絵図」にみられる南門南東側に描かれている石垣に該当するものと考えられる。

遺物は、溝埋土から発見された陶器皿片、板材、下層の第24層から土師皿（第8図1）、客土中から瓦片、陶器片が出土した。客土中から出土した陶器の中には砂目が観察される皿が1点含まれている。

【第9・10図 図版6・7・8】 [第9・10図 図版6・7・8]

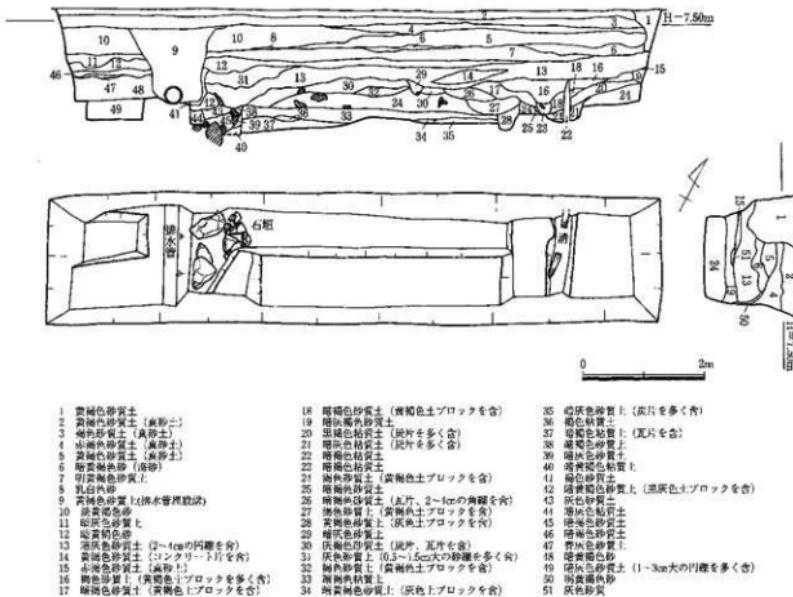
二の丸の南壁石垣から31mあまり南側のグランド内に設定した3×8mのトレンチである。地表下70~90cmあまりはグランドやガス管の埋設溝等の施設整備に伴い改変されているが、第32層以下の堆積層

には変化の影響はなく旧来の状態を保っている。標高7m以下の層序は比較的整然としおり、灰色系粘質土の33、34層、その下層には黒灰色砂質土(35層)、暗灰色砂(37層)の堆積が見られる。

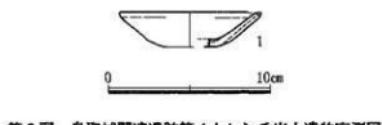
遺構は礎石と杭列が検出された。礎石は第34層の上面に位置し、7石(S1~S7)が確認された。いずれも規則的に配置され、S1~S2、S4~S7、S5~S6間は0.9m、S2~S3、S3~S4、S4~S5、S6~S7間が2.1mを測る。建物の全体規模、構造は不明であるが、一定の規格にそって建築された建物であることは明らかである。礎石には30~70cm人の扁平な石材を用いているが、大型の礎石1石(S1)の上面に柱の痕跡が染み状に残っていた。痕跡は方形を呈し、一辺15cmを測ることから建物に五寸角の柱が用いられていたことがわかる。

杭列は礎石のS4とS5間に位置しほぼ東西に延びる。杭には幅8~12cmの角材を用いている。断面観察で掘り方が認められないことから直接打ち込んで設置しているものとみられるが、杭間隔等に規則性は認められず性格不明である。

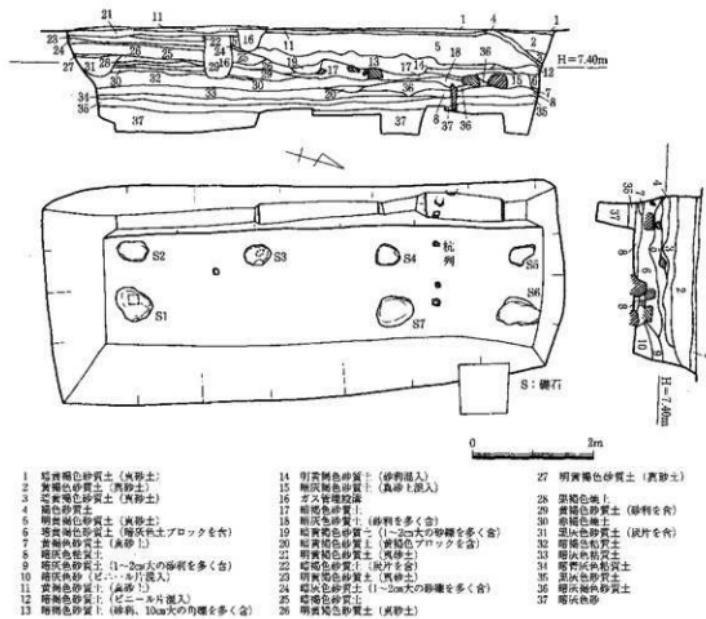
遺物は、下層の第33、34層から中国産染付(図版8)、唐津の皿、小壺(図版8)、上師皿(第10図)、下駄が出土している。



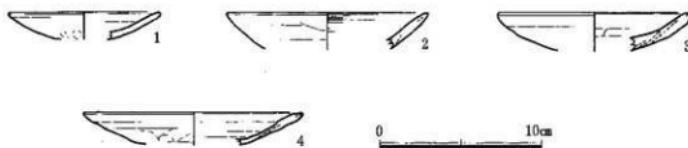
第7図 烏取城間連遺跡第4トレンチ実測図



第8図 烏取城間連遺跡第4トレンチ出土遺物実測図



第9図 鳥取城間連遺跡第5トレンチ実測図



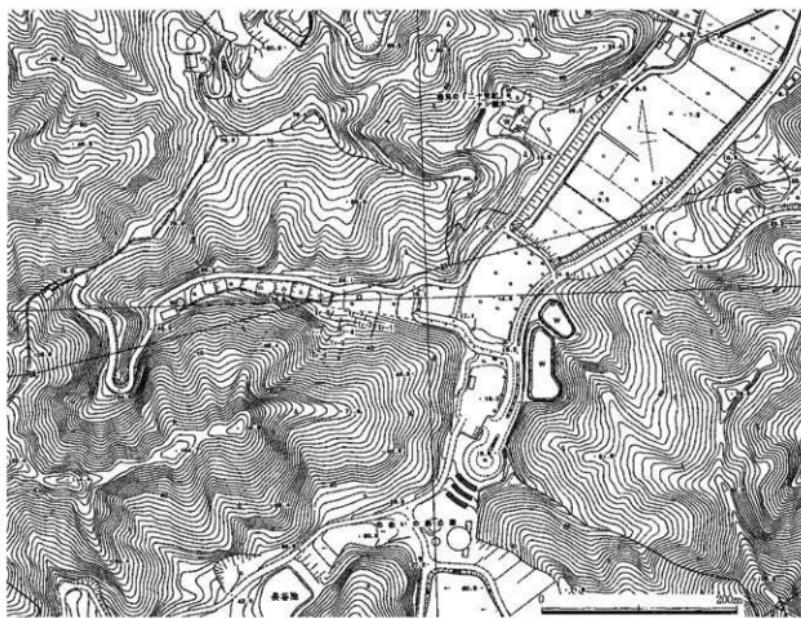
第10図 鳥取城間連遺跡第5トレンチ出土遺物実測図

III 桂見古墳群

1 遺跡の位置と環境

桂見古墳群は鳥取市桂見地内に所在し、湖山池の南東低丘陵に立地している。周辺一帯は、県立布勢総合運動公園整備や、ととりふれ合いの森整備事業等の公共事業のほか、民間の宅地造成が盛んに進められており、これらの開発事業に伴い数多くの発掘調査が行われてきている。桂見古墳群の発掘調査も昭和58年と平成4年に行われ、昭和58年に調査された杜見2号墳は、長辺28m、高さ4.5mの墳丘規模をもち、埋葬施設として4.3mを測る長大な組合式箱式木棺が検出されている。この棺内からは船載鏡である内行花文鏡等が出土しており、主体部規模や副葬品などの内容から鳥取市域のなかでも卓越した古墳として捉えられている。

桂見古墳群の周辺低丘陵上には甲仁古墳群、倉見古墳群、布勢鶴指奥墳墓群や、平野部には桂見遺跡、東桂見遺跡などが展開し、湖山池の南東部一帯は市域の中でも遺跡の密集地域となっている。



第11図 桂見古墳群調査位置図

2 調査の概要

今回の調査は公共施設整備計画に伴い実施したものである。調査対象地は、出会いの森公園の北西側に張り出した低丘陵の北側斜面にあたり、整備計画区域内8箇所に試掘トレンチ（第1～8トレンチ）を設定した。トレンチの設定にあたっては、平成13年度調査で北側丘陵裾部に横穴石室を持つ古墳が確認されていることから、裾部を中心に隆起状地形および平坦部を主に行なった。調査の結果、4基の古墳が確認された。

第1トレンチ[第12図 図版9・10]

丘陵中腹の平坦面から裾部の傾斜変換点に設定した $1 \times 24m$ のトレンチである。中腹平坦部は厚さ10cm前後の表土下に崩落土とみられる角礫を含む褐色粘質土(第2層)と黒褐色粘質土(第3層)が堆積しているが、遺構、遺物は検出されなかった。第2、3層の下層は地山の黄褐色土である。

裾部の傾斜変換点から溝を検出した。溝は地山を掘削して作られており、幅2.4m、深さ30cm前後を測る。溝理土の黒褐色土(第5層)から須恵器壺の体部片が多数出土した。古墳の周溝と考えられる。

第2トレンチ[第13図 図版10]

第1トレンチの西側11mの傾斜変換点に設定した $1 \times 6.5m$ のトレンチである。傾斜変換点の地表下約30cmで地山(第13層)を掘削した幅1.85m、深さ50cm前後の溝を検出した。現状地形からも弧状に巡る窪みが観察されることから古墳の周溝と考えられる。地山上面の第12層と地山殻が混入する第11層が埴丘盛土と思われる。遺物は検出されなかった。

第3トレンチ[第14図 図版10]

第2トレンチの西10mに設定した $1 \times 6.7m$ のトレンチである。調査地の現状はわずかに隆起し、丘陵上方側には溝状の窪みが弧状に認められ古墳の様相を呈していた。

表土下の第2層以下が地山とみられ、地表下約15cmで地山のカット面を検出した。古墳の周溝に伴う掘削と考えられる。トレンチ北側で確認した第9層が埴丘盛土とみられ地山ブロックが混入している。遺物は出土しなかった。

第3トレンチ[図版10] (第15図 図版10)

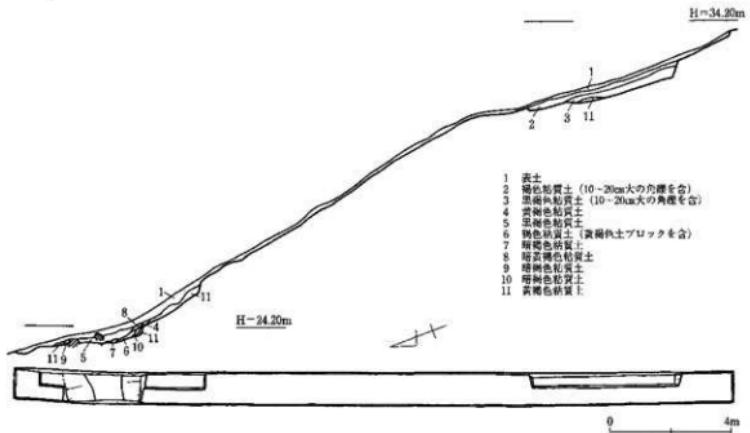
第3トレンチから西10mの緩斜面に設定した $1 \times 15.7\text{m}$ のトレンチである。厚さ11~20cmの表土下には黄褐色系の真砂土と暗褐色、灰褐色、黄褐色の粘質土が細かく堆積している。地山は黄褐色砂質土(真砂土)である。地山を加工した痕跡はなく遺物も検出されなかった。

第4トレンチ[図版11] (第16図 図版11)

第4トレンチの南西8m地点に見られる平坦部に設定した $1 \times 9\text{m}$ のトレンチである。厚15cm前後の表土下には明黄褐色、黄褐色、褐色、暗褐色の砂質土が認められた。トレンチ上方斜面に崩落の痕跡が認められることや、上砂の堆積状況から流出土の堆積によって平坦部が形成されたものと考えられる。遺構、遺物は検出されなかった。

第5トレンチ[図版12] (第17図 図版11)

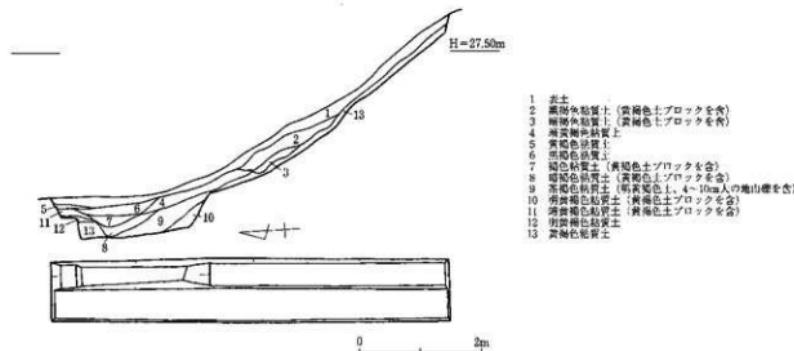
第5トレンチ北西14mの傾斜変換点に設定した $1 \times 9\text{m}$ のトレンチである。丘陵高位側の地表下55cmで地山(第7層)を掘り込んだ地山加工面を検出した。また、トレンチ東端から横穴式石室の袖石と考えられる厚さ50×62cm、長さ102cmあまりの角柱状石材を検出した。石材は立てて配置され、30~42cmの大石材と組み合わせて壁面を構成している。流失が著しいが、東側に開口する横穴式石室をもつ古墳と考えられる。遺物は出土しなかった。



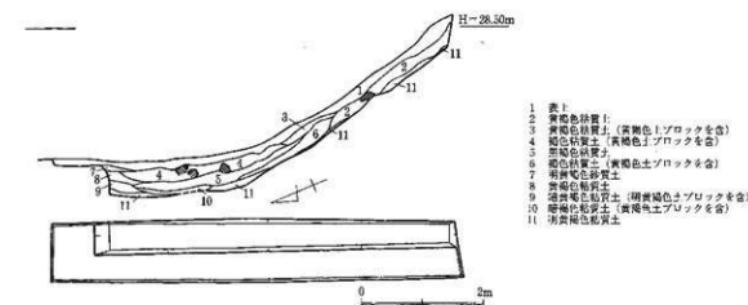
第12図 桂見古墳群第1トレンチ実測図

【第13図桂見古墳群第2トレンチ実測図】(第18図 図版12)

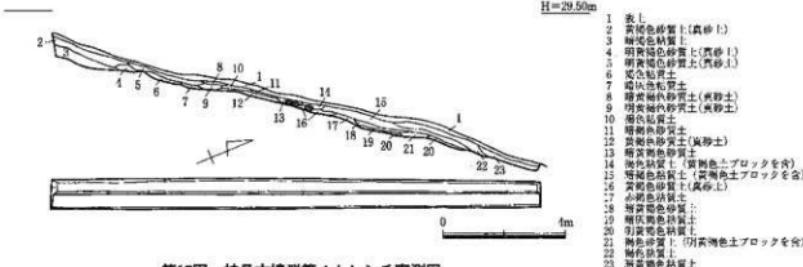
第4トレンチの北西12mに位置し、大型石材(1.4×2.2m)が露頭する緩斜面に設定した1×9.5mのトレンチである。厚さ10~15cmの表七下に黄褐色、暗褐色の砂質土と黄褐色、暗灰褐色、暗褐色の粘質土が堆積している。地山は地表下30~40cmでみられる淡黄褐色粘質土で、地山中および上層堆積土内には大小の角礫が多数含まれている。緩斜面には地山加工の痕跡は見られなかったが、露頭している石材の背面から地山カット面が確認された。石材との関連が予想されるが性格は不明である。遺物は表土の下層から土師器片と須恵器片がそれぞれ1点出土した。



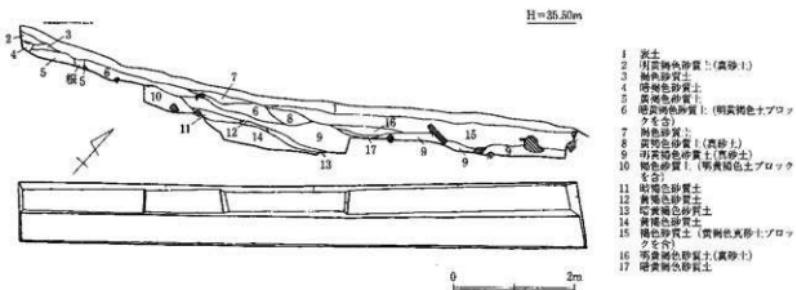
第13図 桂見古墳群第2トレンチ実測図



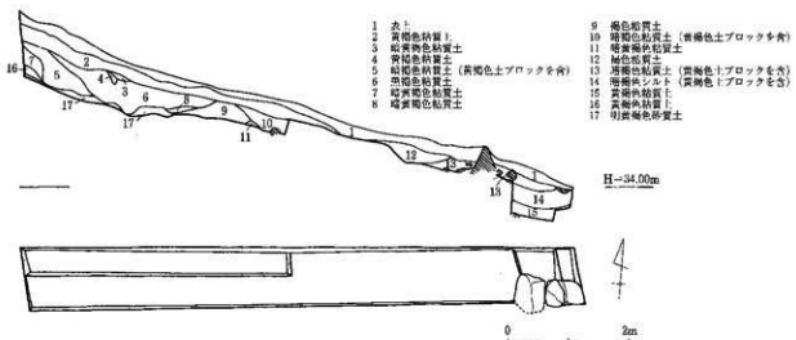
第14図 桂見古墳群第3トレンチ実測図



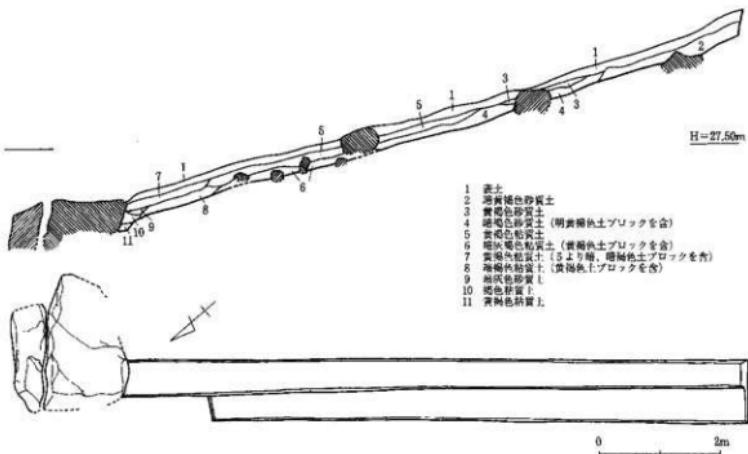
第15図 桂見古墳群第4トレンチ実測図



第16図 桂見古墳群第5トレンチ実測図



第17図 桂見古墳群第7トレンチ実測図



第18図 桂見古墳群第8トレンチ実測図

IV 秋里遺跡

1 遺跡の位置と環境

秋里遺跡はJR鳥取駅から北北西約2.5kmの鳥取市秋里、江津地内に位置し、口千代川左岸に形成された標高3~4mの自然堤防上に立地している。

遺跡は、昭和49年6月に河川改修および国道9号バイパス建設工事中に発見された。昭和49年12月から始まった調査では、大量の土師器とともに船、鳥、馬などを模した土製品が出土し、古墳時代前期~中期の祭祀遺跡であることが明らかになった。また、その後の発掘調査では弥生時代、奈良時代~中世・近世の遺構、遺物が検出され、秋里遺跡が弥生時代中期から中世・近世にかけての複合遺跡であることが明らかになってきている。



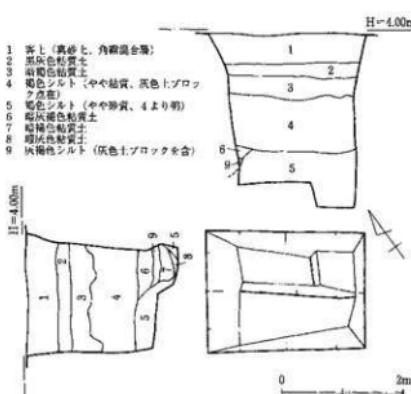
第19図 秋里遺跡調査位置図

2 調査の概要

今回の調査は民間住宅建設に伴って実施したもので、建設予定地内1ヶ所にトレーニング（第1トレーニング）を設定した。調査地は狐川の左岸にあたり、対岸には秋里下水終末処理場が位置している。

第20図 第1トレーニング（第10回 図版12）

2.6×2.0mのトレーニングである。地表面の標高は3.9m前後を測る。地表下50cm厚で客土が認められ、以下は第2~5層の堆積が見られる。遺構はトレーニングの北側から土坑1が検出された。土坑は第5層の上面から掘り込まれ、幅1mあまり、深さ68cmを測る。遺物は土師器が4点出土した。いずれも細片で、出土層は下層の第4、5層である。



第20図 秋里遺跡第1トレーニング実測図

V おわりに

今回の試掘調査は開発事業計画地内における遺跡の所在確認を目的として行った。調査対象遺跡は、鳥取城跡、柱見古墳群、秋里遺跡である。以下、各遺跡の調査結果についてまとめておく。

鳥取城関連遺跡

調査は県立高等学校の整備計画に伴い実施したものである。調査対象地は三の丸南側に位置し、幕末の『鳥取城修復願絵図』に堀（鳥取堀）、石垣、門、塀、蔵などが描かれている地区に当たる。

試掘トレンチは『鳥取城修復願絵図』万延元年（1860年）をもとに5ヶ所（第1～第5トレンチ）設定し、絵図上の鳥取堀、石垣、蔵の所在確認を主眼に行った。

調査地の基本的層序は、地表下0.8～1mまではコンクリート片等が混入する新しい客土で、以下は比較的安定した層序が認められる。包含遺物などから、客土下層がおおむね江戸期に入る土層と考えられる。特徴的な土層についてみると、第2トレンチ下層の標高6.25m前後で焼土層2面が確認された。いずれの焼土層も厚さ2cm前後で面的な広がりをみせ、火災に伴う焼土の可能性がうかがわれる。鳥取城に係わる火災については、城内の大火が焼失した享保5年（1720年）の石黒火事や、文化9年（1812年）の佐橋火事などの大火が知られている。今回検出した焼土層とこれらの大火との関連性は特定できないが、三の丸南側の旧状を知る鍵となる層として捉えることができる。また、第1トレンチ下層で検出した暗灰色粘質土については、土質や検出位置から絵図に見られる「鳥取堀」の埋上あたる可能性が考えられる。

遺構は、第1トレンチから石材を積み構築した水路、第2トレンチから溝状遺構、第4トレンチから溝状遺構とピット、第5トレンチで建物跡（礎石）、杭列を検出した。第2、4、5トレンチで検出した溝、ピット、礎石はいずれも下層から検出した遺構である。第1トレンチの水路については検出面から推定して江戸期以降の施設とみられる。

第5トレンチから検出した礎石は7石を数える。限られた範囲の調査のため建物規模や構造などの詳細は不明であるが、礎石の規則的な配列や礎石上面で確認された15×15cmの角柱の痕跡から大型の建物であることが推測され、検出位置からも幕末の『鳥取城修復願絵図』に描かれている蔵（穀蔵）に伴う礎石の一部と考えられる。また、第4トレンチ西側で検出した石垣についても、鳥取城南門（現在欠失）の南側に描かれている石垣の一部と推察される。

遺物には瓦、陶器皿、土師皿、須恵器、土師器、下駄、板状木製品がある。いずれも残存状況は不良でその大半は客土中から出土しているが、第4トレンチの溝から瀬戸陶器片、第5トレンチ下層で唐津皿、小壺、中国産染付、土師皿がわずかに出土している。

今回の試掘調査で地表下0.8～1mの客土下層には江戸時代の遺構・遺物を包藏することが明らかとなった。今回調査対象とした三の丸南側一帯には屋敷が所在していたことが延宝8年（1680年）の『鳥取城修復願絵図』から知ることができ、これらに伴う遺構も遺存していることが予想される。

桂見古墳群

隆起状地形および地形変換点8ヶ所にトレンチを設定した。調査の結果、丘陵裾部に設定した第1、2、3、7トレンチで地山を掘削した周溝と盛土とみられる堆積層を検出し、4基の古墳が存在することが確認された。このうち第7トレンチからは石室の一部が検出され、横穴式石室を持つ古墳であることが明らかとなった。第1、2、3トレンチで確認した古墳についても石材の露頭が周辺に見られることや、丘陵裾部に立地することなどから横穴式石室をもつ古墳である可能性が考えられる。遺物は第1トレンチの周溝内から須恵器壺の破片が多数出土している。

秋里遺跡

遺構は土坑1が検出され、包含層遺物として土師器片4点が出土した。平成7年度に実施した隣接地の調査では古墳時代後期、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物、井戸、土坑、溝が検出されている。基本的に同様の様相を呈するものと考えられる。

写 真 図 版

図版 1



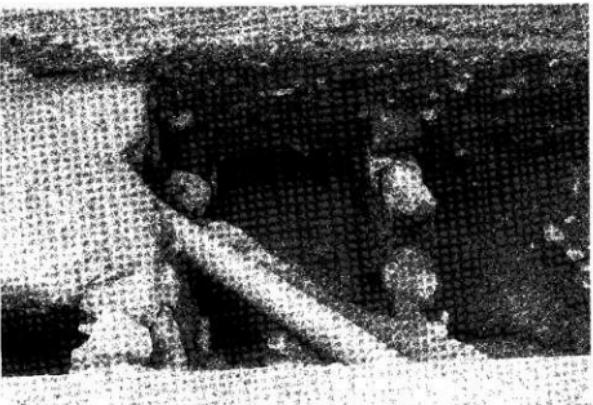
鳥取城関連遺跡
調査地遠景(天球丸から)



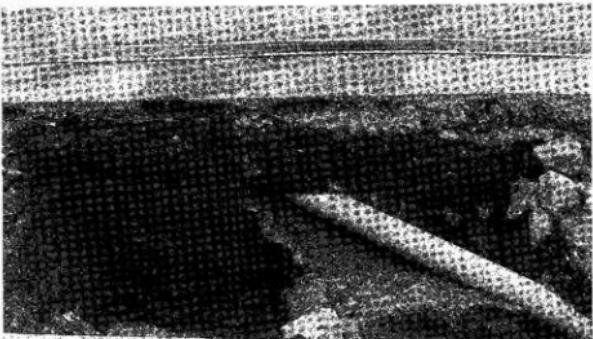
鳥取城関連遺跡
第1トレンチ調査地
(南西から)



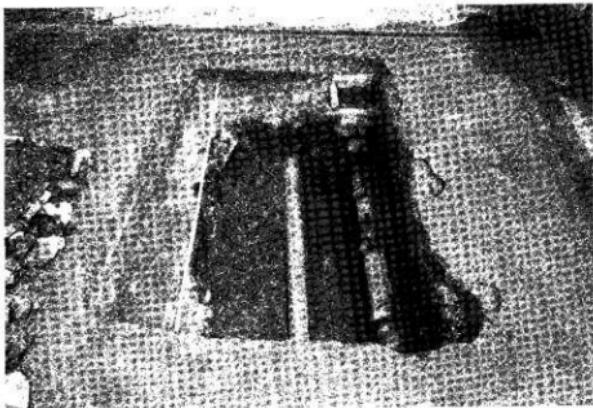
鳥取城関連遺跡
第1トレンチ(北西から)



鳥取城関連遺跡
第1トレンチ
水路検出状況(北東から)



鳥取城関連遺跡
第1トレンチ北東壁断面
(南西から)

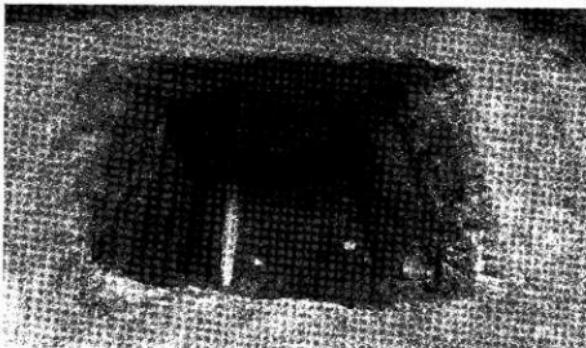


鳥取城関連遺跡
第2トレンチ(南東から)

図版 3



鳥取城関連遺跡
第2トレンチ溝検出状況(北西から)



鳥取城関連遺跡
第3トレンチ(北西から)



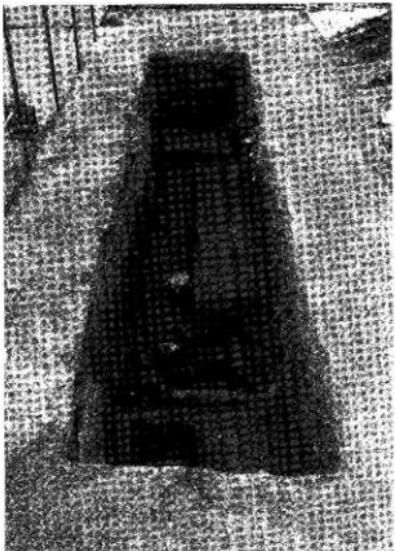
鳥取城関連遺跡
第3トレンチ南東壁断面
(北西から)

図版 4

鳥取城関連遺跡
第3トレンチ出土遺物



鳥取城関連遺跡
第4トレンチ調査地
(南東から)

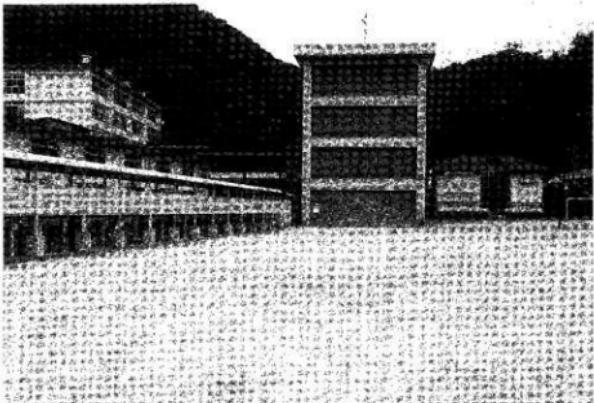


鳥取城関連遺跡
第4トレンチ(南西から)

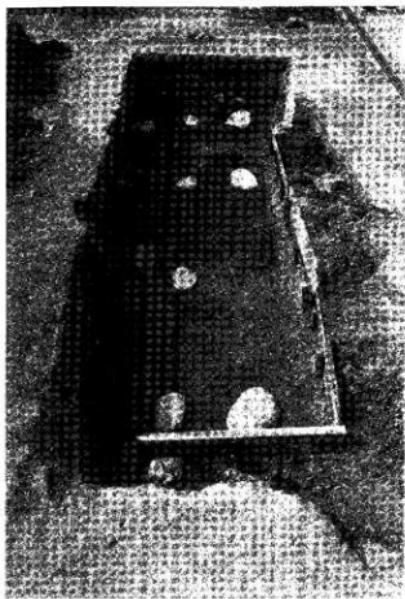
図版 5



図版 6



鳥取城関連遺跡
第5トレンチ調査地
(南西から)



鳥取城関連遺跡
第5トレンチ礎石検出状況
(南東から)

図版 7



鳥取城関連遺跡
第5トレンチ南西壁断面
(北から)



鳥取城関連遺跡
第5トレンチ礎石柱痕跡



鳥取城関連遺跡
第5トレンチ杭列検出状況
(北東から)

鳥取城関連遺跡
第5トレンチ出土遺物



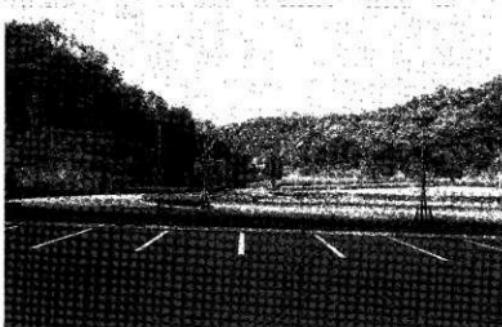
鳥取城関連遺跡
第5トレンチ出土遺物



鳥取城関連遺跡
第5トレンチ出土遺物



図版9



桂見古墳群
調査地遠景(南から)



桂見古墳群
調査地遠景(北西から)



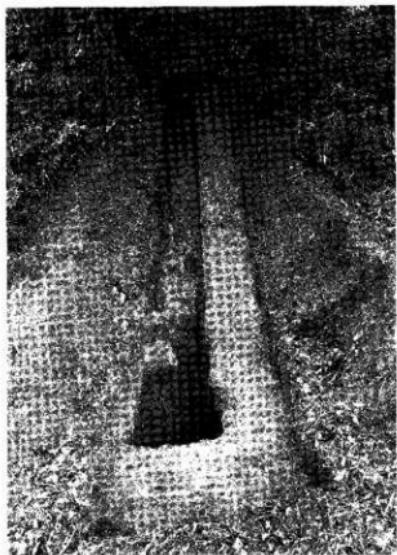
桂見古墳群第1トレンチ(北から)



桂見古墳群第1トレンチ(南から)



桂見古墳群第2トレンチ(北から)



桂見古墳群第3トレンチ(北から)



桂見古墳群第4トレンチ(南から)

図版11



桂見古墳群第5トレンチ(南東から)



桂見古墳群第6トレンチ(北西から)



桂見古墳群第7トレンチ(南西から)

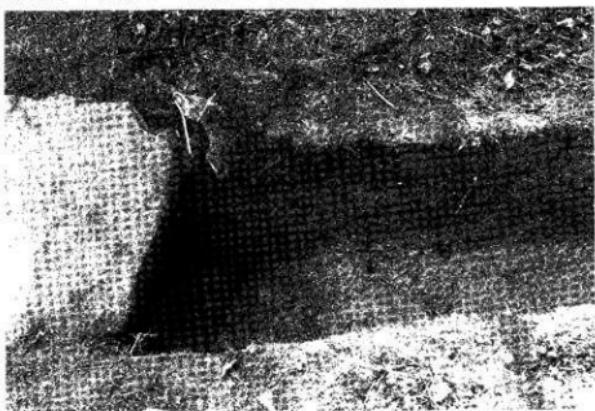


桂見古墳群第7トレンチ(北東から)

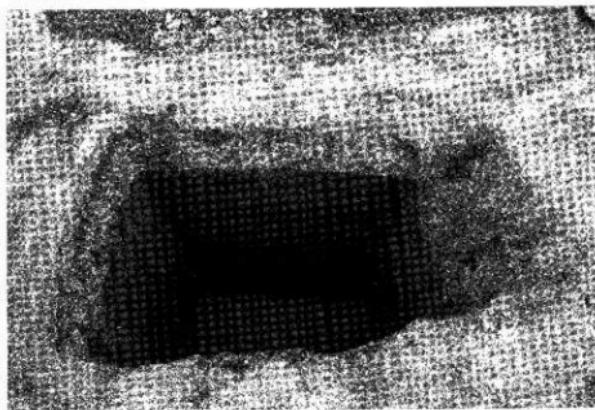
桂見古墳群
第8トレンチ(北東から)



桂見古墳群
第8トレンチ東壁断面
(西から)



秋里遺跡
第1トレンチ(南西から)



報告書抄録

ふりがな 書名	へいせい15(2003)ねんびとっとりしないいせきはくつちょうきがいようほうこくしょ 平成15(2003)年度 烏取市内遺跡発掘調査概要報告書						
副書名	鳥取城関連遺跡・柱見古墳群・秋里遺跡						
卷次	-						
シリーズ名	-						
シリーズ番号	-						
編著者名	前田 均 平川 誠						
編集機関	鳥取市教育委員会						
所在地	〒680-0047 烏取県鳥取市上魚町39 TEL (0857) 22-8111代						
発行年月日	西暦2004年 3月19日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
鳥取城 関連遺跡	鳥取市東町	31201	35°30'11"	134°14'31"	20030722 20030930	80	学校整備
秋里遺跡	鳥取市秋里	31201	35°31'44"	134°13'11"	20031023 20031024	5.2	住宅建設
柱見古墳群	鳥取市柱見	31201	35°25'21"	134°10'22"	20030929 20031010	85.2	公共施設整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
鳥取城 関連遺跡	城跡	江戸	礎石、石垣、溝、杭列	瓦、陶磁器、土師皿	試掘調査		
秋里遺跡	集落	古墳～奈良	土坑	土師器	試掘調査		
柱見古墳群	古墳	古墳	周溝 横穴式石室	須恵器	試掘調査		

平成15(2003)年度
鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

平成16年3月 印刷・発行

編集・発行 鳥取市教育委員会
印刷所 株式会社 矢谷印刷所
